

New Yorkerに聞く
New Yorkの素顔

この街にアーティストたちが 集う理由

ニューヨークはアメリカのビジネスの中心である一方で、アーティストの街でもある。ブロードウエーを目指す役者やダンサー、劇作家を始めとして、才能を磨き、見出されるチャンスを探り集ってくるアーティストたちは、画家、彫刻家、デザイナー、写真家、映像作家など、あらゆるジャンルに及ぶ。ひとりの日本人画家の体験を通して、アーティストにとって「ニューヨークに住むということ」の意味を探った。

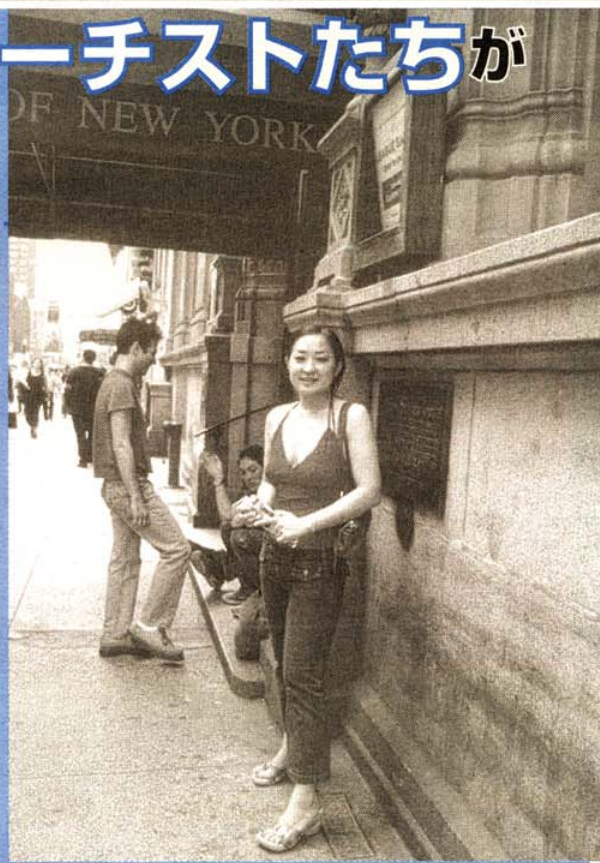
マンハッタン島南部、古い倉庫を利用したロフト・アパートや最新流行のレストランで知られるトライベッカ地区。グラウンド・ゼロに隣接するこの地区のギャラリーで先月、新進画家・六郎田（ろくろうだ）美樹さんが個展を開いていた。岩絵の具や顔料など、日本画材を用いて描かれた色鮮やかな作品の数々が、白い壁面を彩っている。

今回が2度目。1年半前、この場所で最初の個展の機会を得た。“Cosmic Dreams”と題されたその個展では、展示作品の半分ほどが売れた。それが今回につながっている。

今回のタイトルはシンプルに“Pieces”。3度目があるかどうかはこの個展の成否による。「次？ どうでしょうねえ」。不安を口にしながらも六郎田さんの表情は明るい。すでに個展のチャンスを掴んだという経験が自信になり、希望が持てる。二



六郎田さんの住むアパートはミッドタウンにある。マンハッタンの中心部にしては意外に静か。広告代理店のアート・ディレクターを務めるフィアンセといっしょに暮らしている。平日はゆっくりする時間はめったにないが、休みの日には大好きなお料理の本を見てくつろぐことも



ューヨークは「誰にでも平等にチャンスがある街」だと、実感したからだ。

東京の美大で日本画を学んだ。だが、卒業後、数年間逡巡してしまう。「自分は絵を描いてゆくのだろうか。決めかねていた。だが次第に心は創作へと向かってゆく。「それなら1～2年外国へ行ってきたら？」という母親の言葉に後押しされてニューヨークへ来た。それまで、海外経験はほとんど無かった。

アートスクールに通いながら、そこでのカリキュラム消化だけでなく独自の作品制作にもできるだけ時間をとった。渡米から2年半ほど経ったとき、描きためた作品をインターネットにアップ。同時にEメールで多数のギャラリーに連絡し、サイトを見てくれるように頼んだ。翌日かかってきた一本の電話が最初の個展への道を開いた。

この個展は、アートの世界におけるビジネス・ルールのイロハを学ぶ機会にもなった。レセプションの時、見に来てくれたたくさんのお客さんのために、と会場の片隅に自分の名刺を置いた。六郎田さんとしては気を利かせたつもりだったのだが、ギャラリーのオーナーに大目玉をくらって

しまう。展示作品が売れば、利益はギャラリーと画家で折半になる。だからギャラリー側は、画家と顧客の直接取引の可能性を嫌うのだ。

自分の作品をどんな人が買ってくれたのだろうか。知りたいが、名前も何も一切教えてもらえない。さびしいが仕方がなかつ



創作はミッドタウンの貸スタジオで行う。アート制作用に設備が整えられたアーティスト専用のビルの中にある。飾り気はないが、大作を広げて作業するのに十分な空間だ。しんと静まりかえった中で、作業に集中する

た。ギャラリーとの関係を大切にしないと、悪評は業界にすぐ広まって、相手にされなくなってしまう。展示されることで初めて、作品が日の目を見るのだから。

アーティストといえどもビジネス感覚が必要だと、今は思っている。作品が「売れる」ことの重要性は否めない。

「本当はイヤなんです。描いているだけ



▲学校の仲間たちと。六郎田さんは午前中で履修を終えてスタジオに移動するが、友人たちとの情報交換も大切。ランチタイムに学校のカフェで、お弁当を食べながらおしゃべりする

◀ 美術学校 Art Students League of New York の前で。学校には現在も通い続けている。出欠にはかなり厳しい学校だそう。個展のための創作に追われている時には、学生課のアドバイザーに相談して数日の休みをもらったこともある



◀ 個展会場 A Taste of Art で。このギャラリーはグラウンド・ゼロから2ブロックしか離れていない。オープン直前に同時多発テロにみまわれ、営業開始が数カ月延びた

六郎田さんのホームページ：
www.miki6.com

の方がいいんですが、でも、ビジネスの方もちゃんと考えてないといけな

ニューヨークでアーティストとしての第一歩を踏み出した六郎田さんに、かつての迷いはない。「絵をやめたら何も残らない」だから続けていって「いつか自分の作品が一枚でも美術館に飾られたら」と願っている。

日本では、決まったやり方を強いられる気がした。自分を殺して既存の道を行くのはイヤだった。でも、日本の美術界は既に名のある作家しか扱おうとせず、ツテもない新人アーティストが入り込む余地は無い、とも考えた。でも、ニューヨークなら「選べ側が広い目で見えてくれる」。

一方で、ニューヨークにはニューヨークの落とし穴があると思っている。

「強い個性があればあるほど良しとされるから、ある意味、楽なんです。ただし、そんな『何でもありの街』だからこそ、自分の考えをしっかり持っていないと、流されたり、勘違いしてしまう」。

流されているうちに自分を見失い、何をやっているのかわからなくなるのではない。それが怖い。

(赤本 真理子記者)